

教 仏 庵 草

第185号
(発行日)
2005年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答①6 正定聚の身とは

K 「ずっと弥陀の本願についてお話を伺っていますが、今回は第十一願についてお話し下さい」

D 「第十一願は

たとい我仏を得たらんに、国の中人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずは、正覚を取らじ
(わたしが仏になったとき、わたしの国の人々が正定聚の位にあり、必ずさとりに至ることができないようなら、わたしは決してさとりを開くまい)

と誓われています。この願は、定聚に住する人を必ず滅度(さとりに)に至らしめたいと誓われた願です」

K 「定聚とはなんですか」
D 「仏になる身に定まったともがら(聚)、という意味で、正定聚ともいいます」

K 「では滅度とは」
D 「煩惱が滅したさとりの領域のことで涅槃ともいいます。(度)とは迷いの境涯を渡(度)って

覚りの境涯に至ることです」
K 「正定聚に住するのはこの世で住することができるのですか」

D 「親鸞聖人は信心の人はこの世において正定聚に住するのだと仰せられました」

K 「この世で正定聚に住すれば浄土に生まれて仏にならせていただけるというのは、人生における最大の幸せといってもいいですね。では正定聚に住することができるのはなぜですか」

D 「それについて宗祖は
真実信心うるひとは
すなわち定聚のかずにいる
不退のくらしにいらぬれば
かならず滅度にいたらしむ
と仰せられています。真実信心を得るがゆえに正定聚の仲間に入る、それは不退転の位であるから、必ず滅度に至らせて下さる、このようにいわれています」

*
K 「宗祖は何を根拠にそう仰せられるのですか」
D 「仏説無量寿経の仏語に依られています。無量寿経にはその名号を聞いて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。と説かれています。このお言葉の内容は、名号のいわれを聞いて、信心歓喜する人は、浄土に往生することを得て、不退転に住すのだといわれています。(浄

土に住することを得て)とは、浄土に生まれることが定まることを得てという意味で、その人は不退転に住するのだといわれています」

K 「不退転に住するとは」
D 「浄土に生まれ仏になることから退転しない、そういう位につくことを不退転に住するといわれるのです。ですから不退転に住することと定聚に住することとは同じ意味となります。そこで真実信心を頂いた人は正定聚不退転の位に入った人だといわれるのです」

K 「浄土に生まれ仏になることから退転しないということは、浄土に生まれて仏になることに定まることと同じだから、不退転に住することと定聚に住することは同じ意味なのですね」

*
D 「ええそうです。さらに聖人は正定聚の位は弥勒菩薩と同じ位だとも申されます」

K 「弥勒菩薩の位とは何ですか」
D 「弥勒菩薩は次に仏になる位におられる菩薩といわれ、それゆえに等正覚ともいわれます」

K 「等正覚とは」

D 「正覚はつまり仏のさとり、その正覚にほほ等しいほどの境界ということ、仏ではないにしろ仏にほほ等しい位におられるのが弥勒菩薩といわれています。仏教では凡夫と仏との間にはその境界に五十二の段階があり、弥勒菩薩は五十一段階目におられ、次に仏になれる菩薩といわれています。それで弥勒菩薩の境界は五十二段目の仏の境界にほとんど等しい五十一段階目というのです」

K 「正定聚の位は等正覚の弥勒菩薩と同じ位だといわれるのはどうしてですか」

D 「実は仏説無量寿経の第十一願の(定聚に住し、必ず滅度に至らずば)という願文は、仏説無量寿経の原典と同じ内容の原典を翻訳した経典である(無量寿如来会)では第十一願はもし我成仏せんに、国の中の有情、もし決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずは菩提を取らじとあります。ですから如来会の願文と仏説無量寿経の願文とは

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日 (木) 午後二時始まり

講師

大谷大学名誉教授 幡谷明先生

同じ内容を異なる表現で翻訳されたものということになりますから、〈定聚に住し〉と〈決定して等正覚を成り〉とは同意の内容を異なった言葉で表現していることになりす。そうすると正定聚の位は等正覚の位ということになります。一方、等正覚の位は弥勒菩薩の境界ですから、正定聚の位の人には弥勒と同じ位といわれるのです」

K「弥勒菩薩と同じ位ということは何を言い表そうとされるのですか」

D「それは、信心の人はこの生を終えると弥勒と同じく必ず次に仏に成るといふ、それほど真実信心の徳はまことに不可思議な徳であることが知らされます」

K「正定聚の人はこの世のいのちが終わると、すぐに大涅槃の覚り（仏）を完成する、それほど広大な恵みにあずかるのだと思し召しなのですね」

D「ええ、そうです。ただ注意しなくてはならないことは、正定聚の信心の人が弥勒菩薩と同じほどの菩薩としての徳を持つお方になるというのではありません。次に仏になるという位として同じといわれるのです」

*

K「Dさんのお話を聞くといい、〈親鸞聖人の仰せだから間違いないから信じなさい〉という風に私には聞こえますが、それは独断ではないですか」

D「ほかの人から見たら独断と

みえるかも知れません。独断と思われるほど私が聖人のお言葉をそのまま私のメッセージのごとく発信していると思えます」

K「Dさんは聖人のお言葉を良く検討し、良く分かって、間違いないとハッキリと確認してお話になつていられるのですか」

D「私は大変愚かな人間です。私が釈尊のお言葉や聖人のお言葉を聞いて、それが間違いがないかどうか、よく研究し、間違いのないと確認してというのなら、私が釈尊と聖人と同等ないしはそれ以上の人間にならないとできないですね。しかしながら私と仏陀や宗祖とは月とスッポン以上の差があります。私は実に愚鈍な者です。そんな私から釈尊や宗祖にできるだけ素直に信順しているのです。そして信受したまを皆さんにお伝えしているのです。それが独断のようにみえるのかもしれませんが」

K「自分の愚かさを知るゆえに、聖賢の言葉に順うのですね」

D「ええそうですね。ただ、そればかりではありません。過去の多くの先人やまわりの多くの人たちが仏陀や宗祖（仏祖）のお言葉を単純に受け入れることによって、非常なる幸せに入ることができました。そういう歴史の上での証明があるので、仏陀や宗祖のお言葉にたいして非常に信頼しているのです」

K「なるほど、いままでに多く

の人たちが仏祖のお言葉を素直に受け入れて救われたという救いの歴史が、仏祖のお言葉の実性を証ししているのですね」

D「ええそうですね。それに、愚かな私に許された時間は余りありません。人生は速やかに過ぎ去つていきます。これから大いに仏教の思想や道理を深く学んでしかも体験し、そればかりか世界の大思想を研究し、理解して、それを背景にして親鸞聖人のお言葉を深く学ぶという、そういう時間は私にはありません。今、川におぼれかけているような人間です。おぼれかけている人間は岸の上から差し出された（救いの綱をただ信頼する）ほかに道はありません。その綱がどういふ成分でできていて、どれほど頑丈で、引き上げる人は本当に大丈夫かどうか、それを良く理解してからその綱にすがろうとすると、すぐる前におぼれて死んでしまいます」

*

K「確かにそうかもしれません。しかし、親鸞聖人の言葉だからといって無批判に信じるのはウノミではないですか」

D「私は単に初めからウノミにしているわけではありません。教えられたことの意味や真実なることを当然自分の頭で考えます。自分の思案や考えが及ぶところでは考えます。ですから初めからなんでも盲目的に信じ込むというわけではありません」

K「自分の考えの及ぶ範囲までは考えてみるのですね」

*

D「当然、そうです。しかし、釈尊のお言葉や宗祖のお言葉には自分の考えの及ばない処にぶつかります。そういうとき、愚かな私の考えの及ぶところではないと思ひ、仏祖（仏陀や宗祖）のお言葉通りなのだと思ひ、うにしています。ことに救済の仰せである弥勒の本願に対しては人間的知性はとても及びません。弥勒の誓願は不可思議です」

D「なぜそれほど宗祖の言葉を間違いないと思ひるのですか」

K「それは弥勒の本願をそのまま信じているところに、不思議にも私の人生に大いなる安定が与えられたからです。それで〈ああ、仏の言葉は間違いない〉となり、それ以後仏の言葉への信頼が大変強くなりました」

K「弥勒の本願をあるとき信じたら、それ以後仏の言葉に大変信頼を寄せるようになったということですね。最初、弥勒の本願を信じる時は、弥勒の本願で救われることが納得したから信じただけではなかったのですか」

D「ええそうですね。弥勒の本願で救われるかどうか、それを理解してから信じたというのではなく、弥勒の本願が本当かどうか、間違いないかどうか、そんなこととても分かる私ではありません。〈我が名を称えよ〉という本願でなぜ救われるのか、

その深い道理や理屈はとも分りません。ただ理屈はともあれ、あまりにも有り難いゆえに屈離れて添うばかりです。本願を受けいれるところに、不思議にも行きづまり通しの人生に道がついたのです」

K「弥勒の本願はとても凡夫の知性が及ばない。それでどうして助かるのか分からないけれども、本願をタダ単純に受け入れるばかりで不思議にも救われるということですね」

D「そうですね」

K「でもそういうような信心は盲目的信仰とかウノミという人があります」

D「綱の頭を信じるようなウノミの信心はたとえ信じてても永遠の救いが現実化しません。ところが一見、ウノミのような本願への信によって永遠の救いが実際に実現するのです」

K「真実でないものへのウノミの信心には本当の救いをもたらさないのですね」

D「それに、ウノミの信仰はお自分で信じる信心ですが、本願を不思議と信じる信心は実は私の方から〈それじゃあ理屈なしに信じましょう〉と、信じにかかることができないのです。こちらからは信じれないのです。本願の慈悲が私に届いて信じざるをえなくなるというのが実際です」

歎異抄

後序第五講

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、広劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」という金言に、すこしもたがわせおわしませず。（歎異抄後序より）

*

現代語訳——親鸞聖人がつねづね仰せになっていたことですが、「阿弥陀仏が五劫もの長い間思いをめぐらしてたてられた本願をよくよく考えてみると、それはただ、この親鸞一人をお救いくださるためであった。このわたしはそれほどに重い罪を負う身であったのに、救おうと思いついてくださった阿弥陀仏の本願の、何ともつたいないことであろうか」と、しみじみとお話になっておられます。そのことを今あらためて考えてみますと、善導大師の、「自分は現に、深く重い罪悪をかかえて迷いの世界にさまよっている凡夫であり、果てしない過去の世から今に至るまで、いつもこの迷いの世界に沈み、つねに生れ変わり死に変わりし続けてきたのであって、そこから抜け出る縁などない身であると知れ」（散善義）という尊いお言葉と、少しも違つてはおりません。

（語句の説明）

広劫——果てがないほど長い間。劫とは非常に長い時間を表す単位。

それほどの業——五劫思惟していただくねばならないほどの業

出離の縁——迷いを離れる縁

*

親鸞聖人がつねづね申された「つねのおおせ」がここに出されています。おそばにおられた唯円様ですから、聖人のお話の中で何度もお聞きになったお言葉なのでしよう。金子先生の講話の中に、「あの体験をもつておる人間には、また何か一つの深い経験をもつておる人間には、必ず常套語（じょうたうご）というものがあるのであります。それは口癖（くちくせ）のものであります。もう身について全く離れないのですから、それを言わぬとおさまらない」とおっしゃっています。このことは、私が親しくお教えたいただいた先生方もやはり「つねの言葉」というものがありました。その先生を思い出すと、「いつもの言葉」というのが思いうかびます。そのお方に身に付いていて、しかもそのお方の救いとなつていような言葉、それが「つねのおおせ」として語り出されてくるのではないでしようか。聖人のこのお言葉も「いわずにはおれない。こういわずにはおさまらない」という、聖人ご自身を救うよくなお言葉、そういうお言葉が「つねのおおせ」であろうと思います。

ここの「つねのおおせ」には「親鸞一人」と、ご自身の名を名のられているのもその表れでしよう。そういう点では歎異抄第二章の「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしとよき人のおおせをかぶりて信じるほかに別の子細なきなり」というお言葉も同じよう

な重さがあると思います。これら二つのお言葉は聖人のご信心において内面的に密接な関連があるとうかがわれます。

言ってみれば、「地獄は一定すみかの親鸞はただ念仏して弥陀に助けられるほかはない、ただ念仏ばかりでたすけるとの五劫思惟のご本願は、ちりほども助かる縁のない、この親鸞一人のためであった」と、私には聞こえてまいります。この信仰告白には、徹底した人間凝視とその人間をこそ助けんとする無窮（むきゆう）の大悲が、いわば全き暗黒と全き光明が鮮烈（せんれつ）なコントラストをもつてあふれ出たような感があります。

*

聖人が「五劫思惟の願はこの親鸞一人がため」とまで申される信心の世界はとも私の伺い及ぶところではありませんが、弥陀の五劫思惟の願は十方の衆生を浄土に生まれさせたい、助けたいとの願であり、いかにすれば一人ももれなく救うことができるであろうかを、長々と法藏菩薩はご思案下さつたと、そういう風にお聞かせ頂くとすれば、それは救われた機の側から救う法の側に、思いを致して、「よくよく案ずれば」と法藏菩薩のお心をたずねられるのであります。

*

十方衆生を救いたいという、十方とはそれこそ東西南北の四方、南東などの八方、それに上下で十方。上下は上は神々の世界から下は地獄の底までということでありましよう。地獄の底にいる衆生すら、いな地獄の衆生をこそ救わずにはおかけないうそれが「十方衆生」とよびかけたもう弥陀のおこころでありましよう。九品で言えば下下品の衆生、境界であれば地獄の衆生ないしは地獄へおもむ

く衆生、その衆生をどうかして助けたい、それでもつて一切衆生を助けようとの願が五劫思惟の願。五劫思惟の願の眼が一番注がれているのが、罪惡深重の衆生、地獄行の衆生。その衆生をいかにすれば救うことができるか長々お考えになつたのが五劫思惟。それほど思惟して下さらなければ地獄行きの衆生は救われな

下下品の衆生は助からない。いな「この私が救われぬ」。弥陀に五劫思惟させたのは、すなわち「地獄行きの衆生一人も漏らさず救いたい」の思案（しあん）させたのは、「この地獄行きの親鸞のためである」「親鸞一人のためである」との仰せであります。聖人のご和讃に

大聖のおのおのもろともに

凡愚底下のつみびとを

逆悪もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり（観経和讃）

正法の時機とおもえども
底下の凡愚となれる身は

清浄真実のこころなし

発菩提心いかがせん（正像末和讃）

とあつて、底下の凡夫が二力所も和讃されていきます。底下とは下底で一番下。一番最低最悪の者ということ、極重悪人ということ。こういう我が身が「この親鸞である」と感じておられる、まことに畏れ入るお言葉です。その底下の凡夫である「この親鸞を助けようと思いついてくださった」弥陀大悲であると仰せられるのであります。それほどまでの大慈大悲のかたじけなさよと、如来法藏様の大悲を仰いでおられるのであります。（了）

【初めてのインド3】

(昭和45年秋の初めてのインド旅行記)。

マドラスに着いた私たち一行は三々五々、現地の金持ちの家にやっかいになり、夜にこうした現地の人たちと私たちとの交流パーティーが催された。会場には入るとバナナの葉が一人一人の席に敷かれていて、その上にさまざまなインド料理が盛られた。タバコも禁煙、酒も禁酒だった。現地の人たちは夫婦同席で、夫の仕事は映画産業という人たちが多くいた。これはボンベイでの交流会でもそうだった。インドでは映画は庶民の最大の娯楽で、これに携わる人も多いのである。ご婦人は美しいサリーをまとい宝石で身を飾り、気品があつた。その中の一人の美しい婦人が、私が仏教の(僧侶)であると聞いて、質問をしてきた。「あなたは肉を食べますか」と、「食べます」と答えると、「どうしてですか。ブツダはいのちを殺してはいけないといわれたのではないですか。なぜ僧侶であるあなたが肉食をするのですか」と厳しく問うてこられたので、私はたじたじであつたが、(仏教僧としてここで負けてはならぬ)とつまらぬ対抗心を起こし、いろいろ弁解がましいことをカタコト英語で話したが、相手は納得せず執拗に問うて来られたので困っていたところ、そのご婦人のご主人(映画会社の重役)が来て、「まあまあ」といつて中に入り、その場は収まった。南インドの人たちは肉食をせず、肉食主義者が多い。街に出ても肉を出してくれるレストランがごく少ないのである。ただ彼らヒンズー教徒が肉食べないのは「生き物を哀れみ、殺さない」という慈悲の心から食べないというよりは、むしろ肉食をするとその罪によって自分がより不浄になるからであり、不浄になると現在よりもっと来世に悪い世界に生まれるという、そういう輪廻観にもとづく不浄観から肉食をしないのだと思われる。それは要するに「自分の行く末を心配する」からなのではなからうか。生きているいのちその

ものを哀れむ慈悲の心からの自ずからなる発動とは違うのではないかと思うのだが。しかし、その婦人の問いかけはその後、殺生とか肉食とか僧侶とは何かということを考える縁になった。マドラスではその後、ベーターンタソサエティ関係の日本人が以前から住んでいるマンションに行き、泊まらせてもらった。旅はその後、ミニバスをチャーターしマドラスから南下していった。最初にバンガロール、それからマイソールと旅をする。途中非常に美しい庭園を見たりしたが、見たもの多くはすでに忘却の彼方である。バンガロールやマイソールは今ではインドIT産業の中心都市となり様変わりをしているそうだ。当時はヒンズー教の雰囲気はムンムンするところで、人々の信仰心の厚さが迫ってきた。街を歩いているとヒンズー教の小さな説教場があり、その中に多くの女性が真剣に説教師の話を聴いていた。説教師は、日本と言う琵琶法師のように独特の楽器を奏でながら説教をしていたが、私の姿を見るとにつこりとほほえみ中にはいるように手招きをしてくれた。南インドは北インドと比べて経済的にやや豊かで乞食も少なく、人々の態度も穏和である。ただし言語はタミール語で発音はやや荒々しく聞こえる。イスラム教徒は少なくヒンズー色が濃い。マイソールではある線香屋さんに寄った。その主人は知的でしかも態度が丁寧で親切であつた。北インドから南に来ると「ほっと」したのはこういう土地の事情からであろう。更にコインバートルに行き、ある学校の校内にある宿舎に泊めて頂く。その宿舎で大谷大学を出てコインバートルの大学に留学をしていた大谷派の方にお会いした。学校は全寮制かして夕刻にお祈りの時間があり、私たちも出席した。ヒンズー教の美しいお祈りの歌が多くの子供たちによって歌われる。これがまた非常に宗教的な歌で、たましいが揺さぶられる。その後、しばらく静かに冥想をするのである。こういう教育を受けてインドの子供は育つのであろうか、日本とは大違いである。

(続)